

資料渉猟余話

その109

前は飯田に滞在する いてこう記してい
ことなり、まず八
時から飯田高等及び
尋常小学校の授業を
参観した。

飯田城市は天龍
川の西に在りて、
松川其南を流れ、
野底川其北を流
れ、二川城市の東
南に到りて相合
し、東流して天龍
に入る。此城創建

三、飯田・開善寺の 浅井洌

旅行記に「当校は
高等尋常併置の目的
を以て新築に着手
し、現今尚普請中な
り」とある通り、彼
が訪れた飯田学校は
新校舎建設中だっ
た。続けて、校舎の
様子が克明に記され
ているので、原文の
まま記してみよう。

校舎の位置は旧
城址内に在りて：
中央の建物は長さ
二十間、横七間
半、楼上楼下を通
して十六教室を構
え、中央に廊下あ
り。其西の一棟は
十六間に四間半に

して…其東の一棟
は廿一間に四間に
して…教室等計三
十、各室皆五間に
三間の容積を持ち
たり。また体操場
は後方に構えて十
間に七間あり。…
落成の上は頗る使
宜を与ふるや必せ
り。(句読点等筆
者)

その夜、一行は堀
端町の正木屋と達磨
屋に分かれて泊まっ
た。
翌三日、予定では
時又より乗船して天
龍川を下る予定だっ
たが、市の今宮神
社境内の風越館周辺
を巡り、午後一時
頃、宿に帰った。

浅井は、飯田につ
つた。そのため、午

浅井洌の飯田下伊那紀行

明治二五年の修学旅行記より③

鎌倉貞男

女阿藤の墓に詣で
た。そこで、香華を
手向ける者が昼夜絶
えることがないこと
を聞き、一首詠んで
献じた。(歌略)そこ
から、市外の今宮神
社境内の風越館周辺
を巡り、午後一時
頃、宿に帰った。

の年代詳ならず。
弘治年中武田氏に
帰し、天正十年織
田氏に属し、…寛
文十二年堀氏之に
移りてより子孫世
襲して明治四年廢
藩に至り…此地南
方に僻在して三遠
に接する…必ずや
幾層の繁栄を来す



旧飯田学校

…(句読点等筆
者) :
午後三時に飯田を
発った一行は、松尾
を経て竜丘村上河路
の開善寺に到着し、
同寺に泊まった。こ
の間の道は高低迂曲
が多かった。道中、
飯田学校及び他校の
職員が多数見送って
くれた。
この寺に泊まるこ
とができたのは、偏
に斎藤操竜丘学校長
の尽力によるもので
深く感謝したい。そ
の他の諸君にも謝辞
を述べなくてはなら
ないことは多くある
が、何分混雑の折か
ら、一々書き留める
こともできず、ここ
に詳述することはで
きない。どうか、お
許しを願いたい。



浅井洌自筆の飯田学校歌 (『浅井洌』より)

飯田学校歌

長垣塔を築き首の流を
いそぎて堂舎の庭の敷
進ゆくは城の池

其二

雲井を穿て風雲山を
神の山を今もたて
心と油を清くし

其三

本所を穿て水が流る
願も深き間も天の川
大海に流るる

明治四十四年夏
浅井 洌

み利を言 大般若経 等
わず、胸 この時、百人以上
懐瀧々との修学旅行隊に宿を
して物我 提供した開善寺も何
を忘れる かとたいへんだった
思いがす であろう。
る。 一般に、浅井洌は
寺には 教育者の他に、書家
什宝器物 や歌人として語られ
が多くある ことが多い。この
り、師は 旅行記を読む限り、
我々のた それに加えて文筆家
めに、そ ・文章家の一面も強
れらを皆 く感じられる。若い
出して見 頃から、日本の古典
せてくれ や漢籍漢文を学び、
た。その 和漢の学に通暁して
一部を奉 いた浅井だけに、当
げると、 然と言えは当然かも
以下の通 知れない。

*

寺は境内が広く、
老樹が鬱蒼として
て古色を呈してい
る。本堂はもちろ
ん、庫裏や庭も清潔
で、すこぶる塵外の
感がある。住職の中
嶋智恵師は、義に勇
りである。
○飛袈裟 ○古鈴
○古鏡 ○百万塔 面の『資料渉猟余話
○木製五重塔 ○その108』の写真説明
後水尾天皇勅筆歌 で誤りがありました
軸 ○涅槃仏 ○た。正しくは「善光
十三仏像 ○抜烏 屋敷」です。訂正し
屏風 ○紺地金泥 てお詫びします。